

今さら聞けない AI(14) ④AI 兵器の恐怖

2022 年 2 月に始まったロシアのウクライナ侵攻。ウクライナにとっては、物量で上回るロシアとの消耗戦になった結果、遠隔操作型のドローンで偵察や攻撃を行い、何とか対抗してきました。しかし、最近、ロシア側の電波妨害により、ドローンの通信が途絶えて制御を失うケースが増加しています。

そこで、ウクライナは AI を搭載した無人兵器を投入しました。AIなら遠隔操作が不要のため、電波妨害を受けずに自律飛行ができます。ウクライナの発表では、AI 搭載で自動的に目標の追跡を行う無人兵器を既に 2000 機も配備しているそうです。間違いなく、AI 兵器の最前線と言えます。そして、次に目指しているのは、1 人の兵士が複数の無人兵器を操る自律性の高い「無人兵器のスウォーム(群れ)」とことです。一方、ロシアでも AI 搭載・無人兵器の投入が確認されています。戦地で相次ぐ AI 兵器の投入。この開発競争はどこまで突き進むのでしょうか？



複数の無人機を操作する兵士(出典:NHK)

一方、6 万人を越す犠牲が出ているガザでも、イスラエルは AI を使った兵器やシステムを導入しています。一例として「ラベンダー」と呼ばれる AI データベースがあり、イスラム組織ハマスの戦闘員を割り出し、攻撃目標の判断に使われているようです。でも、AI の矢継ぎ早の問い掛けに対して、兵士の判断が追い付いているかどうか？ 多数の民間人を巻き込み、犠牲を生み出す背景に、イスラエル軍の AI があるのではと疑われます。

もし人間が機械に制御を委ね、機械が事実上超人的なスピードで戦っているとしたら、どうやって戦争を終わらせるのでしょうか？ 国連では10年以上前から自律型 AI 兵器について議論がされています。9月24日から始まった国連・安保理事会での「AI と平和、安全保障」公開討論において、グテーレス事務総長は、「近年の紛争は AI を使った自律システムの実験場になっている」と警鐘を鳴らしました。英国、中国をはじめ多くの国が AI 兵器に

懸念を示し、国連による規制を求める中、米国は、「国際機関によるあらゆる規制を拒否する。規制はイノベーションを阻害する」と表明しています

しかし、技術的ガイドラインがなければ、国家間の不安定化は不可避だし、敵国だけでなく、米国自体でも民間人の犠牲が増えたりする事態も想定されます。機械が痛みや犠牲を実感出来ない限り、機械任せは「野に虎を放つ」ことに他なりません。



(竹の台 西元)